

近代文学同人編  
戦後文学の批判と確認

近代文学の  
軌跡

豊島書房／刊

近代文学の軌跡  
戦後文学の批判と確認

昭和四十三年一月 一日 初版発行  
昭和四十三年三月十五日 二版発行  
定価 七九〇円

編者代表 荒 正人

発行者 岡田 富朗

製本所 今泉誠文社

印刷所 工友会工業所

発行所 豊島書房

東京都北区赤羽西一ノ四一ノ三  
電話 東京九〇〇局六九八一番

近代文学同人編  
戦後文学の批判と確認

# 近代文学の 軌跡

豊島書房／刊



## 序 文

荒 正 人

このころ、アメリカを中心として、スペイン戦争に関する研究が急に盛んになり、私のような者のところにも、一日おきに新刊の書籍が届けられる。数年まえ、ロンドンの本屋に、トマス・ヒュートの *Spanish Civil War* が積まれていたころを思うと、風向きは大分変わってきたように思う。——とおなじことが、大分まえから、『近代文学』ないしは戦後文学についてもいわれている。私はかなり早い時期（昭和二五年）に、朝鮮戦争の勃発とともに、戦後は終焉に達し、新しい混乱の時代に入ったことを指摘した。その混乱が何を意味しているかは、明らかにならないでおいた。米ソ協力の密月時代は決定的に終りを告げ、第三次大戦の危機を強くかんじたからである。阿部知二の『ヨーロッパ紀行』（昭和二六年）には、おもに、イギリス知識人の危機感が新鮮な筆致で伝えられている。私は繰り返して読んで、多くを教えられた。共産主義か第三次大戦かということになれば、自分たちは前者を選ぶ。自分たちは、クエーカー教徒で、絶対平和主義者であり、共産主義には反対だけれども、自分たちには、アングロ・サクソン以来の民主主義の伝統があるから、共産主義の割一主義も必ずや内部から改造してみせよう。戦争で滅亡するよりは、苛酷な共産主義を選ぼう。この決意が、どれだけ苦しい選択の後になされたものであるかは、クエーカー教徒でない私には、外部から推測することしかできない。

断っておくが、当時は、まだスターリン主義の時代であり、「雪どけ」以前であり、あの戦慄すべき蕭清の余燼がくすぶっていた。スプートニク1号はむろん、打ちあがっていなかった。世界は、暗黒の底に潜んでいた。

僅かに、中国革命の勝利（一九四九・一〇・一）が、小さい希望を告げていた。第三次大戦が起きれば、日本列島は、四発の原子爆弾（現在の威力は、地球そのものを粉碎するか、否かという地点にまできているが）で、致命的被害を受け、同時に、アメリカ側とロシア側に分れて、血で血を洗う民族の悲劇が展開するだろうと予感されていた。この予感を前提として、戦後は終焉に達し、新しい混乱の時代が始まったと主張したのである。

これを外在的な区分にすぎぬと批判する人たちは、何を以て、内在的区分というのか、教えを乞いたい。また、昭和二十年代を、「占領下の文学」と「マス・コミュニケーション下の文学」と分類することにも、俄かに賛意を表しがたい。マッカーサーは、解放者として迎えられていたわけではない。この問題は、戦後の歴史の最も重要な点だと思ふが、かれがフィリップピンで、共産党をいかに弾圧したかは、占領が始まった初期から囁やかれていた。私事を語れば、同人雑誌にすぎぬ『近代文学』に発表した私の文章は、ずたずたに切られ、しかも、検閲したあとが読者にわからぬように祖まねばならなかった。そのとき、私がどんな感想を洩らしたかは、埴谷雄高がすでに記しているから省略したい。

私の強調したいのは、戦争に負けたからといって、自由解放の世の中が訪れ、占領されているという意識を全く失っていたなどということとは、事実と反する。私は、そのような悲難を最も滑稽だと思ふ。戦後を朝鮮戦争の勃発で区切るか、それとも、戦後なども無視して、講和条約の結ばれたときまでを占領下とみとめて、文学史の区分に適用するかは、結局は、昭和二〇年代という同時代の認識をいかにするかにかかわる。

それは、八・一五を、どう受け止めたか？ 一二・八を、どう受け止めたか？ いや、スターリングラード「ヴォルガグラード」で、ドイツ軍が決定的に敗北したときに何を考えたか？ ——等々の問題にまで通じる。それは、根本的には、明治一〇〇年の受け取り方にも関係しよう。

他人について語るよりも、私自身について語ろう。私は、スターリングラードで、ロシア軍が勝利を収めたという数行の外電のなかに、これで将来の歴史の方向が決定的に定まったことをかんじ、近くに住んでいたある生物学者に、その世界史的意義を繰り返し主張し、賛成をえた。そんなことに何の意味があるか、と思う人たちは、

二・八も八・一五も、私と全く逆の立場で受け取った人たちであろう。そういう人たちは、スプートニク1号が打ちあげられた人類史の意味も納得できないで、宇宙ばかりか宇宙ほけとかを繰り返していた良識人であろう。私は、いまでも思ひだす。私の近所に住んでいた八十歳を越える老女は、不自由な体で、真夜中の暗い空を横切る、スプートニク1号に眺め入っていた。彼女はべつに、ロシヤびいきでも、宇宙旅行のファンでもなかった。ただ、明治時代に最高の教育を受けた知性の高い女性の一人であった。

ここで少し飛躍するが、敗戦を、小学校の初年級で迎えた人たちは、いま三十歳を越えたばかりだが、この人たちは、時代の犠牲者である。かれらは、墨で黒々と教科書を塗りつぶされ、学校でも教育方針が混乱し、家庭でも父母は食糧難で、子供の教育どころではなかった。だから、基本的教育を受ける機会がないままに大人になった。少数の例外を除けば、かれらは、戦後や戦後文学について云々する準備がまだできていない。スプートニク1号に見入ったあの老女の足許にも及ばぬ。そういう人たちは、貧しい心で勉強をするか、または、特殊世代として身を処する以外に、新旧の両世代の間に伍してゆく方法はないのかもしれない。

戦後ないし戦後文学について、本気で考えてもらいたいのは、いま指摘した人たちより古い世代か、または、新しい世代である。

たとえば、一九三〇年代について、正面から考えているのは、意外に若い人たち、二十代の男女であることを発見して、意を強くしたことがある。一九三〇年代は、日本では、昭和一〇年代後半、中国では中日戦争、ロシヤでは大蕭条、アメリカではニュー・デイル、ドイツとイタリアではファシズム、スペインでは市民戦争、西ヨーロッパ各国では、不安と危機に襲われた時代であった。そういう時代に関心のない人たちは、戦後も戦後文学も、興味がないであろう。たとえ、なにかの理由で関心を抱いても、視点が初めから狂っているから、不毛の結果しか生れぬ。これは予め断っておいたほうがよい。そういう時代的関心がなければ、ドストエーフスキーも、ニーチェも、サルトルも、カミュも、馬の耳に念仏であろう。そういう人たちにおさえつらいむきのアメリカ産玩具がある。それは、ニュー・クリティシズムである。そんな程度のものをいじって、想像力がどうとかおしや

べりをしながら、一生を棒に振るがよからう。

一九三四年（昭和九）には、「ナルプ」が解散を発表し、プロレタリア文学運動が壊滅し、文学者の転向が行い、他の芸術、文化団体にも波及した。転向文学が書かれる反面では、文芸復興、行動主義、不安の文学が流行した。——東北地方の兇作で農村危機は深刻化した。軍需産業は活況を呈し、軍部の発言は強化された。階級闘争は、弾圧の結果、低調になったが、逆に、農民の土地闘争は盛りあがってきた。日本共産党は、深刻な分派闘争を行っていたが、「全協」も内訌を起し、壊滅に瀕した。合法無産党は、右へ右へと傾斜していった。中国では、瑞金ソヴィエト地区が国民党政府に占領され、大長征が始まった。フランス、オーストリア、スペインでは、ファシズムと反ファシズムが激しく争っていたが、ドイツでは、ヒトラーが総統になり、ロシアでは、キエロフの暗殺を発端として、蕭清が始まった。

一九三〇年の半ば、一九三五年（昭和一〇）は、日本共産党が壊滅した年であり、『赤旗』は終刊号を出したが、一方、『世界文化』や『社会評論』が創刊され、また『日本浪漫派』も発刊された。軍部では、皇道派と統制派が激しく争い、永田鉄山が相沢中佐に殺された。一口にいつて、物騒とした時代であった。中国では、抗日戦線宣言（八一宣言）を発表し、また、フランスでは人民戦線が成立し、第七回コミンテルン大会で、人民戦線政策が正式に採用されたが、ロシアでは、大蕭清が開始されていた。また、ドイツでは、ザール地方を併合し、イタリアは、エチオピア戦争をはじめていた。日本の知識階級は、非常時の不安のなかで、右往左往しながらバスに乗り遅れまいとしていた。文学者の転向はほぼ完了し、転向派と非転向派が次第にはっきりしてきた。

一九三六年（昭和一一）には、皇道派の二・二六事件が起きたが、その直前には、総選挙が行なわれ、無産派の進出が目立ち、労働者、農民の間には、漠然とした反戦的気運が生じ、人民戦線の初歩的形態が生れ始めていたし、日本共産党の再建運動が盛んになり、『赤旗』も復刊第一号が発刊された。また、野坂参三、山本懸蔵は「日本の共産主義者への手紙」をモスクワで発表した。反ファシズムの気運は急速にたかまった。それにたいし、弾圧は一段と激しくなり、メーデーは禁止され、大本教は結社を禁止され、また、年末には、共産党中央再建運



備委員会事件として、一〇〇〇名以上の活動分子が検挙された。国際的には、スペインとフランスで、人民戦線政府が樹立されたが、前者では、フランコの反政府軍が内乱を起こし、後者では、不干渉政策を取り、一方、ロシアでは、トイツキー・ジェノヴィエフ合同本部事件の公判が行われた。年末には、西安事件が発生し、蔣介石は軟禁され、中国共産党と国民党の合作が行われることになった。

（一九三七年（昭和一二））には、階級闘争の波は一段と高くなり、衆議員の総選挙では、無産派は前年の六〇万票から、一〇〇万票に達した。共産党再建のためのグループ活動も次第に目立ってきた。この傾向に決定的打撃を与えたのは、七・七に発生した日中戦争であった。中国では、朱徳が第八路軍を編成し、中国共産党は、民族の抗日戦争を呼びかけていた。ロシアでは、暗い蕭清が依然として続き、並行本部事件、トハチエフスキー事件が起きた。そのなかで、第二次五か年計画の完成が発表された。スペインでは、内乱が続き、ドイツの空軍は、ゲルニカを爆撃した。フランスのブルム内閣は、人民戦線綱領停止を声明した。

一九三五年から日中戦争の勃発する三年余りは、全く息づまるような緊張の連続であった。この時期に、何を考え、何を行ったかが、昭和一〇年代を生きる意欲を決定することになったといえよう。煩をいとわず、国内と国外の事態をあえて年表的に拾ってみた次第である。この三年余りは、国際的、国内的規模で、二つの力が激しく争っていた。そのどちらに就くか、または、どちらにもつかぬかは、当事者の世界観、人生観によって決定し、同時に、世界観、人生観を形成した。それは繰り返していうが、息づまるような時代であった。

この混乱のなかから浮びあがるのは、共産主義対ファシズムである。だが、コミンテルンは、人民戦線戦術を採り、民族資本家をもふくめて、反ファシズム勢力を結集しようとしたが、ファシズムは、ドイツ、イタリア、日本と手を結び、フランコその他の反動勢力を結集し、反ユダヤ主義や反主知主義のもとに、各地で野蠻の限りを尽した。バルカン諸国は、右と左に激しく揺れたが、結局は、ファシズムに屈伏した。ファシズムの残虐行為は、部分的には伝えられていたが、日本に広く知られるようになったのは、戦後数年たってからであった。ヨーロッパでは、地理的關係からも早くから知らされていたらしいが、その規模が明らかになったのは、ナチが打倒

されてからであった。蕭清の場合は、少し異なる。スペイン戦争に、「国際義勇軍」が参加したころから、「モスクワ裁判」その他の情報は流れていた。ケストラーもスペイン戦争に赴き、フランコ側に捕えられ、死刑を宣告され、危うく救助された。『真昼の暗黒』を発表したのは、一九四〇年（昭和一四）であった。それは、日本の転向小説とは全く異なった、政治小説であった。この政治小説が翻訳されたのは、一九四九年（昭和二四）であった。この時代の十年間の落差は、いろいろなことを語る。西ヨーロッパの知識人の間では、平凡な常識になっていたことが、日本の知識人の間で、良識になったのは、ソ連共産党第二〇回大会（一九五六）以後である。それまでは、蕭清は、大本営発表のように素朴に信じられ、それを批判する者は、反共的、反ソ的として非難攻撃された。

ここで問題は、少し複雑になる。ヒューマニズム（ユマニスム）という、ギリシャ、ローマ以来の伝統が問題となる。キリスト教や共産主義が、ヒューマニズムと誤解されている知的風土のなかで、この問題を納得してもらうことは必ずしも容易ではない。それを承知のうえで、私が強調したいのは、人民戦線とファシズムという図式は、実は、文明と野蛮とおきかえなければならぬと思う。人民戦線は、最近、余り人気がないようだが、私は少し意見を異にする。人民戦線が反ファシズムのためとして結集されたのは、ヒューマニズムに呼びかけたのである。フランス大革命を経ているヨーロッパ人は、共産主義とヒューマニズムは、一線を劃するものであることを知りながら、人民戦線の一翼を荷なったのである。むしろ、アンドレ・ジイドその他のように、西ヨーロッパの腐敗と墮落を憤る余り、社会主義建設のなかに、「四福音書」の理想の実現を望んだ人たちもいる。かれらは、スペイン戦争で戦死するか、生き残った者たちは、蕭清、スペイン戦争、独ソ不可侵条約の三つの事件で、共産主義に幻滅をかんじ、転向したといわれる。その転向は、日本の場合のように、外的強制の結果、良心に反して、共産主義を棄てるのではなく、良心に従って共産主義から離れるので、両者は明確に区別しなくてはならぬ。後者は、「自由主義」つまり、ヒューマニズムに復帰することができた。ヒューマニズムを拠りどころに、ファシズムの野蛮と戦うことができた。第二次大戦を通じて、ヨーロッパ全土に広がったレジスタンスには、民族的自

覺という要素が大いに働いていたことは事実だが、一段と高い次元では、ヨーロッパのヒューマニズムの擁護という理想が、人びとの心を激しく揺り動かしていたように思う。——一例をあげれば、日本でも、戦後、広く読まれている『星の王子さま』をかけたサン・テクジュペリなどは、ユマニストの典型である。かれは、フランスを愛した。そして同時に、人間を心から愛していた。かれは、第二次大戦で、空軍に従事していたが、フランスが敗れた際、アメリカに亡命したけれども、レジスタンス運動が始まったとき、再び故国に戻り、反ファシズムのために戦った。かれは、行動主義の実践者として、戦前から名声を博し、日本にも紹介されていたが、人間の条件を、緊張した時間のなかで探求するという、行動主義を支えた、人間性と連帯責任に関しては、どれだけ理解されたか、心もとない。

私は、戦争中、二つの仮定について考えてみた。第一は、アメリカ軍が、本土上陸作戦を展開するようになれば戦争の性格も変り、一種の民族戦線が結集され、日本共産党も合法化され、この戦線の一翼に立つのではないか。第二は、延安に、野坂参三（岡野といったが）を中心とする日本人グループが結成されていることを知った際、やがて、一種の亡命政権が樹立され、それが日本を支配することがあるかもしれない。前者については、友人と語りあったこともあるが、後者については、孤独な密室のなかで、話しあう相手もいなかった。——戦後、大熊信行は、太平洋戦争の末期に、「日本人民共和国」が列島の一角に樹立されていたならば、という大胆な仮定のもとに、国家論にもとづく、独特な戦争責任論を展開していた。

私は、この想定から多く学ぶところがあつた。日本は島国だから、亡命も抵抗も行われなかつたと信じられているが、これは短見にすぎぬ。なるほど、ノルウェーやユーゴスラヴィアのような激しいレジスタンスの展開には、山岳地帯という地理的条件が有利であつたといえよう。だが、それは決して本質的なものではない。国土がどんなに狭小であろうと、抵抗運動は起きる。結局は、民族の精神の問題である。『星の王子さま』の著者のように、人間性を守り、連帯性を尊重する精神があれば、文明を野蛮から守りぬくことはできる。「日本人民共和国」がついに生れなかつたのは、形而下の理由からではなく、形而上の原因にもとづく。サン・テクジュペリが

フランスを愛した結果、自分の生命を犠牲にしたのは、ユマニスムの伝統を承継いだものであるが、その愛国心は、エロスやアガペーを越えた愛であることは疑いをいれぬ。私たちの伝統には、しかし、アガペーはむろんのこと、エロスとしての愛さえ乏しいように思う。だから、一切の可能性を奪われているなどといっているのではない。日本人には、日本人としての民族的可能性がある。そのことは忘れてはならぬ。——現代のカトリックは、布教にあたり、民族的性格を十分に考慮に入れようとする努力しているが、共産主義は、その点に関しては、プロテスタントとおなじで、土着化を無視するか、否定する立場を持つている。少なくともこれまでそんなふうに見えた。いずれにせよ、文化人類学という、民族的中核の問題は大いに考慮する必要がある。私は学生のころから柳田民俗学の崇拜者であったが、戦後は、文化人類学に強い関心を抱くようになった。日本人の民族的性格を知るためには、江戸時代などから始めるのでは、物の役にも立たぬ。縄文式土器や弥生式の時代まで溯らなくてはならぬ。民族的中核の変化には、数千年ないし数万年ぐらゐの時間が必要である。

昭和十年代の対決点は、文明または野蛮の選択ということに通じると思う。ファシズムがはたして野蛮か、どうかということにも複雑な問題はある。ヒトラーは、最後には、ドイツ民族の抹殺ということも考えていたらしい。ゲルマン民族には、宇宙の壊滅ということが語り伝えられていた。私は、「終末の日」で、北ヨーロッパ神話に伝えられている「神々の黄昏」について語ったが、その真意は、誰にも気づかれなかったであろう。だが、十世紀も後になって、見よ、である。私は、ファシズムをつらぬく虚無主義（ロシアのニヒリズムは、否定主義と訳すべきであろう。虚無主義とは区別しなければならぬ）に、ゲルマン民族の古い伝統の面影をかんじる。それだけに、ファシズムの根がいかに深いものであるかをみとめる。私は心からファシズムを憎む。ユダヤ人の大虐殺は、私の念頭から永久に消えることがない。ナチの責任者が逮捕され、処分されるまでは、ドイツの土地を踏むまいとひそかに心に決めている。私は、ドイツ民族が、ユダヤ人虐殺の責任をとり、地上から抹殺されても決して驚かぬ。エトルリア人やヒッタイト人は、絶滅したが、今日ではだれも格別愛惜の念を抱かぬとおなじである。個人の場合、他人を殺せば、死刑になる以上、民族の場合、他の民族の大量殺戮をすれば、絶滅されても

仕方がないであろう。ナチの打倒や崩壊だけでは、罪は償われぬと思う。——おなじ論理は、蕭清についても適用されるかもしれぬ。この場合は、一定の党派の範囲にかぎられるかもしれぬが、各国の戦争遂行者にたいしてもまた然りである。——

『近代文学』で、戦後まっさきに戦争責任の問題を追求し、それを内面化し、やがて転向の問題に突きあたったのは、以上のような精神的背景に立っている。私は、同人の共通項ではなく、個人の体験として語ってきた。だが、おそらく、他の同人たちも、それぞれの立場から共感を惜しまぬであろう。

第三者の眼に、私たちの姿がどう映ったかは、年代により、立場により、さまざまだと思う。瀬沼茂樹の『近代文学』の批評家たち（明治書院刊『戦後文学の動向』所収）は、同人たちの姿を丹念に伝えている。私に関するかぎりは、不満な点は少しもない。ただ、補足的に書き留めておきたいことはある。私は、小学校二年のとき、アドヴェンティストという小会派のプロテスタント教会で、初めて、キリスト教を知り、組合教会で洗礼を受けた。その間、優れた牧師や宣教師や男女の信者から深い影響を受けた。また、教会に通い始めたころ、『日本少年』で、宇宙旅行のすごろくを手に入れ、宇宙に関する興味の糸口を開かれた。この二つは、私の精神形成の最も深い層として、いまでも残っている。もう一つ、キリスト教から、共産主義に移る過程で、私は、アナーキズムの魅力に惹かれた。それは、国家の権力に強い反発を覚えたからである。権力というのは、軍国主義であり、また、中央集権主義でもあった。個人の自由を強く主張しなかったからである。共産主義が中央集権を採り、権力を振り廻すと、必ず弊害を生じるように思ったからである。そのころ、大杉栄たちの虐殺に関して、共産主義の側から、なぜ、抗議がなされぬのかと、不思議でならなかった。なお、ここで注釈を加えておきたいのは、アドヴェンティスト教会が、純粋なプロテスタントではなく、ユダヤ教の要素を含んでいたのではないかと思う。少し調べてみたが、結局、わからなかった。ただし、小会派に特有の異端的ユートピア思想が根底に潜んでいたように思う。この推定はあやまっているかもしれぬ。いずれにせよ、私が十代のなかばで、心を惹かれたのは、権力を否定するアナーキズムであった。ただし、技術文明が発達し、共産主義とは、電化プラスソヴェート権力

であると、いわれていたのに、政府否定の自由連合では、現実的に無理だろうという矛盾にも突きあたった。その結果、共産主義へ推移したのであるが、初めは、トロツキーの人間の魅力にとらえられた。むしろ、レーニンのプロテスタント的生き方には敬愛の念を禁じえなかった。レーニンについては、トロツキーというのが、私の幼い道筋であった。スターリンはなんとなく親しめなかった。「内訌」が終り、スターリンが勝ち、トロツキーが負けてからも、私は、トロツキーからスターリンに転向するには、数年にわたって内心の痛みを体験したことを告白しなければならぬ。いずれにせよ、キリスト教から共産主義への道は、ヒューマニズムの内面的成長にほかならなかつた。それは、私の十代の後半の精神史である。他の人たちは、どのような道筋でスターリン主義を信奉したのだろうか。

だが、後になって、キリスト教も、共産主義も、ヒューマニズムとは一戦を劃するものであることを知り、自己の土台を自分の足で踏み固める必要があることを痛感した。キリスト教がヒューマニズムでなくても少しも困らぬが、共産主義がヒューマニズムでないことを知ったのは、蕭清の結果である。共産主義は、ヒューマニズムの先頭に立つことはある。だが、両者は、最後の一点で異なる。カトリックは、神の御業を実現するためには、手段をえらばぬ点がある。だが、共産主義も、その点では変らぬ。ヴァレリーふうにいえば、両極は一致するのかもしれない。私は、そのことで、カトリックも、共産主義も否認するつもりはない。目的のためには、手段を選ばねばならぬが、歴史的緊張のなかでは、目的を選んでいる余裕がないことがある。その場合に、共産主義の非人間的態度が非難されるが、それは余り苛酷にすぎない。だが、ヒューマニズムという次元に立つならば、人間は手段でない。手段であつてはならぬ。それに似たことを、共産主義者が語るとすれば、それは、共産主義を理想化する余り、共産主義の根本的性格を否定していることにはなる。正直な共産主義者ならば、こういうわねばなるまい。われわれは、ヒューマニズムも手段として利用することがある。それでもやむをえぬではないか。現在、人民戦線は、良識人から非難されている。私はそれには反対である。ヒューマニズムの側にも、共産主義を手段として利用する権利がある。ヒューマニズムは、北ヨーロッパ神話のロキのように、キリスト教にも、アナキズ

ムにも、共產主義にも姿を変えることができる。それでよいではないか。文句をつける余地などはない。姿を変えても、ヒューマニズムがヒューマニズムであることには少しも変りがない。その点を繰り返して強調したい。

ここ数年來、いや、十年以上も昔から、戦後文学への批判ないし否定論が提出されている。その動機や理由は、論者によって、それぞれ異なっている。簡単に一括することはできぬ。しかし、文壇的評価はともかくとして、文学史的事実は、簡単に抹殺できるものではない。一九三〇年代の政治的蕭清が、後になって、名譽回復という措置を取らなくてはならなかったように、また、スペイン戦争が改めて再評価されているように、現在の戦後文学も、一段と正確な評価の対象になる時期が必ずあるだろう。あれは、一種の、シユトルム・ウン・ド・ダシの時代であつた。私たちは、そういう時代のなかで精一杯に生き抜いたことに静かな満足を感じている。将来、もっと大きい変動期がやってくるかもしれない。だが、そのとき、私たちの提出し、摸索し、追求した問題は必ず取りあげられるであろう。それは疑問の余地がない。むしろ、私は、もう一度、戦後が生じるなどといっているのではない。そんなことのないことを切望する。だが、歴史の流れをせめて、数世紀の単位で眺めるならば、必ずや根本的変革は訪れるであろう。それが急激なものであるか、緩慢なものであるか、それとも両者の複合であるかは、俄かに予断を許さぬ。変革は、しかし、必ず訪れる。繰り返していうが、そのとき私たちの戦後はもう一度新しい評価を受けるであろう。それは、本質的評価である。——政治と文学に関する論争なども、表層では、すでに半分は決着がついているかと思う。深層の点まで掘り下げれば、問題はおのずとべつである。それとはべつに、未解決のままに放置されたもの、いや、何かの理由で中止された部分もある。それには、外部からは窺うことのできぬ特別の理由もある。私もいまそれを語りたくない。だが、近い将来に、おのずと判明するかもしれない。しななくてもよい。歴史は事実のある部分を闇から闇へ葬りながら転回する。当事者も、一切を語り尽くすことだけが、唯一の方法ではない。

私だけについていえば、戦後文学をめぐる諸問題は、カトリックとプロテスタント、キリスト教とヒューマニズムとの類推で、広い歴史的視野に掬い上げることができると思っている。また、日本民族の問題とも深い関係

があると考えている。歴史的単位も数百年ではなく数千年になろう。その場合には、文化人類学の見方も採り入れなくてはなるまい。文学の条件としての知的風土の問題になると、伝統の問題を考えなくてはならぬが、それは、民族的視野と同時に、人類史的視野が必要になる。前者も、後者も、数世紀では足りず、数千年ないし数万年を単位に深く考えてみなくてはならぬ。戦後文学も瞬間であり、また、瞬間のなかに永遠の知恵が宿っている。文学史家は、この一点を心に銘記しなくてはならぬ。だが、これはあくまで、私ひとりの立場である。他の人たちには、またべつの視点があるはずである。

私たちの論議は、ある部分については余りに幼なく、ある部分に関しては、極端に難解かもしれぬ。それ以外に表現の方法がなかったのである。その理由の一つは、昭和初年のプロレタリア文学運動や、昭和十年代の苦難とを背景にしているからである。両者ともに、文献的には、氷山の一角しか発表されていないことはいうまでもない。私たちが『近代文学』の誌上で関係者の出席のもとに、多面的な見当を行った。それは、『討論日本プロレタリア文学運動史』（三一書房刊）に収録されている。

この文献が、戦後二十年の激動の後に、私たちの捧げるささやかな贈り物として受け取っていただければ幸いである。私たちは、徒らに、回顧的になつてゐるのではない。未来に社会的、技術的な大変革を予感しながら、過去を反省し、前進の資料に役立てたいと思つてゐる。イエスの言葉を引き合いにだそう。——「己が物を取りて往け、この後の者に汝とひとしく与ふるは、我が意なり。」



\* 目次

正篇

1 序文\* 荒正人

I 転形期の文学を語る

19 文学者の責務

41 文学と現実——藏原惟人を囲んで

63 民主主義文学の問題——中野重治を囲んで

85 コメデイ・リテルール——小林秀雄を囲んで

107 今日の文学——宮本百合子を囲んで

II 戦後文学の批判と確認——その仕事と人間

133 荒正人

179 野間宏

229 平野謙

265 椎名麟三

305 埴谷雄高